

●『東方』二八四号より

時代の精神と共に歩む文学論の軌跡

藤井省三

(1) 岸教授の本と私の出会い

本書は三〇年以上ものあいだ、早稲田大学で現代中国文学を講じて今年三月に退休された岸陽子教授の自選論集である。『東方』編集部より書評執筆の依頼を受けて、私はパソコンに向かっているのだが、ひと言の前置きもなしに批評を始めることはどうしても出来ない。私にとって岸教授とは、竹内好や丸山昇らと共に私が現代中国文学を専攻する以前に出会った著者の一人であるからだ。

私が最初に岸教授の本に出会ったのは、一九七二年の大学入学前後のことではなかったろうか。今も手元に残っている『造反する芸術』の奥付に、この年の一月第一刷と記されているからだ。この本は日中国交正常化(當時は一般に「日中国交回復」と称していた)を「念願し努力」

していた朝日新聞社が、「過去の日中間の歴史をふりかえり、躍動する中国の現状を正確に理解する」(同書あとがき)ことを目的として刊行した叢書『朝日市民教室「日本と中国」の一冊である。』躍動する中国」とはすなわち、一九六六年に始まり、当時紅衛兵であった鄭義が後年語るところによれば実はすでに「ブレーキのきかぬ慣性運動」(『中国の地の底』朝日新聞社、一九九三)と化していた文化大革命を意味していた。同書で岸教授は「人民の芸術——革命的現代京劇」の章を担当し、巻末の座談会「現代中国芸術は日本人にとっておもしろいか」に中国文学者の飯倉照平、批評家の上野恵司両氏らとともに参加している。

文革中の中国では、「一人の作家と八つの模範劇」と言われるように、小説で

岸陽子著

中国知識人の百年

——文学の視座から

中国知識人の百年

文学の視座から

岸 陽子



A5判 350頁

早稲田大学出版部

[5040円]

は浩然(一九三二)の農業集団化を描いた長編『艷陽天』など、舞台・映画では革命バレー版の『白毛女』、鉄道員一家を主人公にして日中戦争期の抵抗を描いた革命現代京劇『紅灯記』など一群の模範劇だけが出版・上演・上映を許されていた。『造反する芸術』とは「八つの模範劇」を指すのであり、「革命的現代京劇」の章を担当した岸教授は、まさに文革中国文化界の核心部に踏み込んでいたのだ。そして私が二年後の専修課程進学の際に中文科を選んだのは、高校から大学へと進学する前後に、岸教授の論文と座談会発言を読んだことも、一つの原因であったと思う。

ちなみに文革中に既成作家のほとんどは激しい批判を浴びて幹部学校という名の収容所に送り込まれ、リンチによって殺害されたり迫害に耐えかねて自殺した作家も多数にのぼったこと、文学・芸術関係の書籍は一九六二年から六六年までは毎年三五〇〇から四六〇〇点出ていたにもかかわらず、六七年には一六七点、六九年には一一七点と激減したことなど文革の惨状が日本にも正確に伝わっているのは七〇年代末以後のことであった。

(2) 王国維と魯迅と竹内好

さて本書第一部「新しい「知」を求めて」は王国維（一八七七～一九二七）と明治日本の社会主義者で文芸批評家でもあった田岡嶺雲（一八七〇～一九二二）との比較研究から始まる。一八九九年上海に渡った田岡は王国維に日本語や英語を教えるとともに、ショーペンハウアーの哲学を伝えている点を指摘した上で、岸教授は両者の相違を次のように指摘している。

嶺雲が、矛盾に満ちた一面をもちながらも「一草一木への同情」を貧しき

人びとに向けて、書くものすべて発禁の措置を受け、初期社会主義者として位置づけられるような人生を生きたのにたいして、王国維は時代の動きに背を向け、学術研究の中にみずからを閉ざしていった。

岸教授はさらに近代化における功利主義を批判する田岡と出会うことにより、王国維は「新学」を学び始めた人生の出発点においてはやくも「近代」にたいする絶望を先取りしてしまった」とも述べており、その後の王国維自殺事件などを考えるととりわけ興味深い。

続く「王国維「辮髪」攷」では、辛亥革命（一九一一）により清朝皇帝が退位した際、民国政府は清室に外国君主としての礼を尽くすと約束しながら、のちに武力によってその約束を反故としたことへの王国維による抗議を、岸教授は「清室の遺老としての発言」ではなく、「市民社会の論理」による批判であったと論じている点も新鮮である。

本書「あとがき」によれば、岸教授は指導教授であった竹内好（一九一〇～一

九七七)の示唆で修論のテーマに王国維の詩論を選んだという。それから二〇年以上が経過した一九八七年、上海で王国維に関する初めての国際学会が開かれたのがきっかけで、田岡との比較論を執筆したのである。察するにかつて文革に深く共感しながら七〇年代末に文革の悲惨さを知ることになる岸教授は、なおも現代中国文学を読み続けようとしてその原点の一つである王国維文学へと回帰していったのではあるまいか。

一九九八年発表の「竹内好の王国維論」は、一九三七年の『中国文学』王国維特輯号掲載の論文を取り上げて、竹内が「何よりも王国維を詩人として捉え」ており、詩人とは竹内にとって「外界とみずからの内部の交感と拮抗をたった一点に集約して表象する存在」であったと指摘しており興味深い。このような素朴なロマン主義が、竹内の些か偏狭な魯迅論や文革容認論の萌芽となっているように私には思えるからだ。

八〇年代に発表された魯迅論二篇(魯迅の知識人論)「魯迅とハイネ」は紙幅の

関係で表題の紹介だけに留め、第一部最後の論文「以沫相濡——魯迅亡きあとの朱安と許広平」に飛びたい。一九〇六年七月、東京留学中の魯迅の元に、母危篤の電報が届いたので急いで帰国すると母は健在で婚礼の用意が整っていたが、初めて会う新婦の朱安(一八七八—一九四七)は纏足(てんそく)をして字も読めなかった。いっぽう許広平(一八九八—一九六八)は北京女子師範大学で講師を勤める魯迅に手紙を送って文通を開始し、二年半後の二七年一〇月には上海で同棲を開始する新しい女であった。

岸教授は「朱安の心をかろうじて支えたのは魯迅の正夫人は自分であるという矜持」であったと考察するいっぽう、「愛の勝者許広平」は「みずからの愛を実現するためには、形の上では人びとの生活の中に残されている旧習に甘んじ、実際には魯迅と共にその重い「遺産」を背負」った結果、魯迅の母の魯瑞と朱許の三人は、「それぞれがそれぞれのかたちで耐えることによって魯迅への愛を貫き、それを唯一の拠りどころとして「家

族」のきずなを結んでいた」と考察している。岸教授は結びで「思想も教養も異なる二人の妻が、魯迅への愛をきずなにして、激動の世に肩を寄せ合っていく心理的過程は彼女たちの交わした手紙の間から読み取れるが、それについては母魯瑞と許広平との書簡とともに稿を改めたい」とも述べており、新稿が待たれる。

(3)「満洲」体験と文革体験

第二部「日本支配下の女性作家たち」は、日中戦争期に上海で「地下黨員」として活躍した関露(一九〇八—一九八二)と、東北地方出身の女性作家梅娘(一九二〇—)、但娣(一九一六—?)、呉瑛(一九一五—一九六二)の四人に関する最近数年間の論文を集めている。

中国の女性たちが「男尊女卑……を再生産する社会構造を打破しえぬうちに、……同じ男性中心主義の論理を共有する異民族の支配下におかれた」時、女性作家はあるいは「男性への従属を拒否し、主体的に生きることのできる自立した女性を育てるためにながしかの影響」を

与えんとして敵地となった上海で女性誌編集を続け、あるいは「身体性が強い」東北の方言を多用した徹底的に会話体の文章」により「女」の言葉」で語ろうとしたという。また四人の作家が人民共和国成立後には「漢奸」として迫害され、作家生命ばかりか家族の命まで失っていたことを指摘して、岸教授はたとえば「関露の生と死は、日本の中国侵略が数値によって示される災禍だけでなく、中国の人びとの魂に癒やしようなない深い傷痕を刻んでいることを証言している」とも鋭く指摘している。

本書「あとがき」を岸教授は「私は中国の東北で生まれた」と書き出し、敗戦後は「満洲国」官僚であった「父の骨と痛恨」を北満の大地に埋め、「逐われる者として日本に引き揚げてきた」と語っている。近代中国文学を専攻したのも、「非情な歴史の記述が切り棄てていかざるをえない個々の人間の生の軌跡」をたどろうと思ったからとも語っている。その意味でも、第Ⅱ部の四篇は岸教授執念の作品群といえよう。

「第Ⅲ部（新時期文学）の展開」には「京劇革命」その後」というエッセーが収録されている。岸教授は「文化大革命以来、私の関心は中国において文化遺産の継承と創造の関係が、どのようにとらえられているかにあった」と述べて、京劇改革の歴史をたどるうちに「革命的現代京劇」に出会い、これに教授自身が与えた「従来の京劇を媒介として生み出された新しい人民の歌舞劇」という評価は「今も基本的には変わっていない」と記している。京劇改革論としては私も異論はないが、

人民に多大な犠牲を強いた毛沢東の権力闘争という文革の本質を考えると、「新しい人民の歌舞劇」説は些かお気楽に過ぎるのではあるまいか。もともとこのエッセーは文革終息直後の一九七九年に発表されており、その後岸教授の現代文学論が広く深く展開していく様子は、第Ⅰ・Ⅱ部の諸論文から十分に窺えるのだが、それでも岸教授の革命京劇論を読んで現代文学研究を志した私は、岸教授にたとえば「竹内魯迅」の所謂「回心」がいかなる形で生じているのか、改めて

語って欲しかった、と思うのだ。

第Ⅲ部にはほかに張承志、陳建功をめぐる論文、第Ⅳ部「現代文学の諸相」には王安憶、残雪、葉広冬、韓少功、莫言、高行健そして朝鮮族短篇小説選らに対する書評が収録されている。八〇年代から現在に至るまで、中国同時代文学の翻訳は岸教授の重要な仕事の一つであり、これらの諸篇では、研究者＋翻訳家としての視点から、万華鏡のような現代中国文学が魅力たっぷりに紹介されているのである。

（東京大学）